

私の教育実践

—音楽の学びを止めないために—

今治市立鳥生小学校 教諭 眞木 千代

1 音楽の授業で大切な三つのこと

「いったいどうやって音楽の授業をすればいいのだろう？」

初めて音楽主任になった7年前、毎日この言葉を叫んでいた。何も分からなかった私に、一つ一つ音楽教育の基礎を教えてくださいましたのは、尊敬する音楽教育者のS先生である。あるとき、先生から音楽の授業で大切な三つのことを教えていただいた。一つ目は、「音楽の活動が



たっぷりあること」。二つ目は、「関わり合いの楽しさがあること」。三つ目は「児童の変容があり、教師にそれを見逃さない敏感さがあること」である。以来、この三つを自分の指針として大切にしてきたが、コロナ禍でどれも行き詰まってしまう、再び冒頭の言葉を叫ぶことになった。しかし道は必ずあるはず。音楽の学びを止めないために、三つの指針に新しい気持ちで挑戦しようと決めた。

2 音楽の活動量確保—歌の森での常時活動

4月、中庭の木々の間を縫って2mごとに印を付け、「歌の森」を作った。授業では、印の上に立った子どもたちに、「森の空気を吸って、空に声を響かせよう！」と声を掛けた。最初は声が散って不安そうな様子であったが、好きな歌をたくさん歌ったりリズム遊びを楽しんだりするうちに、笑顔と声が飛び出してきた。臨時休校で小さくしぼんでいた子どもたちの声と心を、音楽と緑の木々が開放してくれたのだ。

3 関わり合いの楽しさ構築—6年生「動機をもとに音楽をつくろう」の授業実践

音楽室には、吹奏楽器以外の楽器をかき集め、協働的な学びの場を作ることに力を入れた。6年生では、「こんなチャイムがあったら」と題して、動機（モチー

フ)を基にした音楽づくりのペア学習に取り組んだ。子どもたちは、木琴や鉄琴、トーンチャイム等たくさんの楽器に喜び、最初は即興的な演奏を楽しんでいた。しかし、しばらくすると、友達の音と偶然美しい和音ができたことから、音の重ね方を考えたり変化させたりするなど、友達との関わりの中で音楽の構造やまとまりを意識し始めた。男子ペアがつくった「テストが0点だった日のチャイム」の、いかにも悲しげな短調の響きにはみんなで大笑いした。音楽は一人でも楽しめる。しかし、時間と空間を共有し、一つのものをつくり上げたり、違いを認め合ったりするとき、その楽しみが倍加するということを実感した。

4 児童の変容の見取り—2年生「タやけこやけ」の授業研究

2学期は、愛媛大学教育学部との共同研究「技能を育てる低学年歌唱授業—思いを表現できる身体の使い方の指導を通して—」に取り組んだ。今、思い切り歌うことはできなくても、身体を動かすことはできる。そこで、声楽的な根拠に基づいた身体の動きを「歌の魔法」と名付け、模倣的学習や言葉掛けによって、技能を伸ばすことを試みた。口元が見えない分、一人一人の変容を身体全体の動きから捉え、小さな声も聞き逃さないようにした。その中で、最初全く声が出なかった児童が、両手を広げ、「おててつないでみな帰ろ」と優しい声で歌っているのに気付いたときには、胸が熱くなった。身体の動きが発声器官を助けたことに加えて、友達と実際に手をつなげない中、手をつなぐ温かいイメージが声を引き出したのだと思った。

5 今、音楽を教えることの意味

この1年、芸術は不要不急という空気が流れる中、音楽を教える意味を考えながら授業に取り組んできた。今年度全面実施された学習指導要領には、音楽科が育成を目指すのは「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」であると示されている。生活や社会が大きな不安の中にある今だからこそ、音楽科が果たす役割は大きい。子どもたちが学校の外でも、音楽の力で不安を乗り越え、人とつながっていけることを目指し、挑戦を続けたい。